

1．河川の総合的な保全と利用に関する基本方針

(1) 流域及び河川の概要

手取川は、その源を石川県石川郡の白山(標高 2,702m)に発し、尾添川、大日川等の支流を合わせ、石川郡鶴来町地先に至り、これより山間部を離れ石川県の誇る穀倉地帯である加賀平野を西流し、石川郡美川町において日本海に注ぐ、幹川流路延長72km、流域面積809km²の一級河川である。また、山地が全流域の92%を占めており、平地はわずかでそのほとんどが農地となっている。

その流域は、鶴来町をはじめ13市町村にまたがっており、この地域における社会・経済・文化の基盤をなしている。また、その豊かな流れは、古くから人々の生活を支え文化を育てており、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

手取川流域は、上中流域の山地部と下流部の扇状地に大別され、上流域は非常に古い年代や中生代の岩層、風化や侵食を受けやすい白山火山の噴出物など変化に富んだ地質であり、地すべり地や崩壊地が多数存在している。

また、日本海型気候に属しており、年平均降水量は平野部で約2,500mm、山地部で約3,000mmと多雨である。特に山地部は有数の豪雪地帯である。

上流の山岳地域は、白山国立公園に指定されており、全国有数の規模と原始性を誇るブナの自然林が分布し、クロユリなどの高山植物の宝庫ともなっている。これらを棲みかとして、国指定の特別天然記念物である、ニホンカモシカやヤマメ、イヌワシなど、多種多様な動物が生息している。魚類では、ヤマメ、イワナなどの渓流魚が多く見られる。また、恐竜や植物の化石が多く産出することで知られる手取層群が分布している。地形は急峻で渓谷が発達しており、手取川ダムなど豊富な水量を利用した水力発電が行われている。また、川沿いに点在するキャンプ場や手取川ダム湖畔などには多くの人々が訪れている。

手取川が尾添川と合流した後、鶴来までの中流部には、長い時間をかけて流紋岩を侵食し自然の造形美を示す手取渓谷があり、夏には、川下りやキャンプなど

に利用されている。また、川沿いの河岸段丘では田園風景が広がっている。

溪谷をぬけた下流部では、鶴来を扇頂部として日本海に向かって扇状地が形成されている。この手取川扇状地では、古くから手取川からのかんがい施設が整備され、早場米産地として知られているほか、豊かな地下水を利用し、古くから酒造業が盛んで、近年では先端産業の各種製造工場が立地している。また、アユやサケが遡上するほか、ウグイ、アブラハヤ、カマキリ等が生息している。河道内の中州や高水敷では、近年、カワヤナギやアキグミなどの木本群落が繁茂し、水際にはツルヨシやヨシ - オギ群落等が見られる。希少な鳥であるコアジサシの繁殖も確認されている。

手取川は、我が国有数の急流河川であり、多雨・多雪地帯であることから、古くから洪水による被害が発生している。特に、昭和9年7月11日に発生した洪水による被害は甚大で、堤防越水や侵食により数カ所で破堤し、97名の人命が奪われ、2,113町歩の耕地が手取川から流出した土砂等により埋没したという記録が残されている。

手取川水系の治水事業は、明治24年及び同29年に起きた大水害を契機として、明治29年から同35年にかけて、鶴来から河口までの区間について石川県により実施されたのが発端である。その後、昭和9年7月11日未曾有の大出水が起こり、水源から河口までほとんど全域にわたって大被害が発生した。この出水を契機として、鶴来から河口までの区間について改修計画を策定し、同年12月から直轄事業として着工した。この計画は、基準地点の鶴来における計画高水流量を4,500m³/sと定め、鶴来から下流の平野部においてこれを安全に流下させるため、つとめて旧堤を利用した河道計画をたて、河床に堆積した土砂を掘削するとともに、激流に対処して護岸、根固^{ねがため}を施工するものであった。昭和41年には一級河川に指定され、昭和42年に、基準地点の鶴来における基本高水のピーク流量を6,000m³/sとし、このうち洪水調節施設により1,000m³/sを調節し、計画高水流量を5,000m³/sとする計画を策定した。その後、昭和43年に大日川ダム、昭和55年に手取川ダムが完成し、現在に至っている。

砂防事業は、明治24年の濃尾^{のうび}地震を契機として大正元年から石川県により着手されたが、荒廃地が広大で土砂生産が著しく工事が至難なことから、昭和2年か

ら直轄事業として施行することとなり、現在に至っている。

また、現在「白山砂防科学館」を拠点として、防災情報の収集と発信を行っている。

一方、昭和9年の出水により大量の土砂が河道内に堆積したが、その後の河道掘削や砂利採取により全川的に河床が低下した。近年では、流況の平準化や砂利採取の規制等により河床高は安定化傾向にある。

河川水の利用については、手取川の急峻な地形と豊富な水量を背景に、古くから水力発電や、農業用水、水道用水としての利用が広く行われてきた。現在、水力発電としては、明治40年に運転開始された神子清水^{みこしみず}発電所を始めとして24ヶ所の発電所により、総最大出力519,410KWの電力供給が行なわれている。また、農業用水としては、約10,000haに及ぶ耕地のかんがい^{かんがい}に利用され、加賀平野の水田地帯を潤している。水道用水としては、石川県全人口のほぼ3/4にあたる金沢市をはじめ6市10町に供給されている。しかし、一方で、河川水の利用に伴い、減水区間が所々で発生している。

下流部の手取川扇状地では、石川県内においても最も良好な帯水層が分布し地下水量の豊富な地域であり、その水は水道用水、工業用水、農業用水その他の水源として利用されている。

水質については、BOD(75%値)は、概ね1.0mg/l未満で推移し、環境基準(手取川の風嵐^{かざらしたに}谷川合流点から手取川橋で1.0mg/l)を満足しており、全国でも上位に入る清流河川となっている。

河川の利用としては、夏のアユ釣の時期になると多くの釣り人が訪れ、秋には大量のサケが遡上し手取川の風物詩となっている。また、数少ない高水敷を利用した河川公園等が憩いの場として整備されており、散策やスポーツの場として利用されている。河川水辺の国勢調査結果によると散策やスポーツの利用者が多く、年間利用者数の約8割を占めている。